平成 18 年度明石高専海外語学研修プログラム: 実現までの経緯と今後の課題

穐本 浩美*　大和 知史*

A Review and Evaluation of the Study Abroad Program for Akashi National College of Technology (2)

Hiromi AKIMOTO, Kazuhito YAMATO

ABSTRACT

Akashi College of Technology carried out its second study abroad program in March of 2007. This paper reports on the planning, implementation, and achievements of the three-week program conducted at the University of Auckland, New Zealand. Considering some points of concern remained from the first program, the second attempt was carried out and seemed to be a success.

KEY WORDS: study abroad program, planning, implementation, achievements

1. はじめに

平成17年3月にカナダのヴィクトリア大学へのホームステイプログラムを実施した。翌年の平成 18 年はオーストラリアへのプログラムを企画していたが、参加希望人数が少なく、実施には至らなかった。

そして平成19年3月には、参加希望者も十分に集まり、ニュージーランドのオークランド大学へのホームステイプログラムが実現の運びとなった。

本稿は、平成 18 年度ホームステイプログラムの実現までの経緯を報告し、これまでのプログラムとの比較も行いながら、今後の課題を検討するものである。

2. 事前調査・前回の反省と今回の経緯

この度のオークランド大学へのホームステイプログラムを実施するにあたり、ヴィクトリア大学でのプログラムより明らかになった点を確認し、専門委員会を立ち上げプログラム内容にも修正を加えた。

2.1 専門委員会の立ち上げ

前回は英語科教員が事前調査、準備、プログラムの実行までを行なったが、平成 18 年度に国際交流を扱う国際交流委員会が組織されたことにより、ホームステイプログラムの業務は同委員会へ移された。同委員会は学術交流、学生派遣、留学生受入の 3 専門委員会で成り立っており、ホームステイプログラムを含む短期留学、長期留学は学生派遣専門委員会が取り扱うこととなった。

2.2 事前調査

学生派遣専門委員会でまず検討されたことは、長期的展望に立ち受け入れ先大学を再調査することであった。アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドの各国で語学プログラムが充実しており、工学系の学部を有する大学のリストアップを試みた。リストアップされた大学の中から治安面、プログラムの充実度、大学の規模などを検討した結果、オークランド大学にて第 2 回目の海外研修を実施する運びとなった。平成 18 年の夏期休暇までにオークランド大学との間でプログラム作成のための連絡を取ると共に、留学に特化した旅行社である株式会社 ISA よりも情報の提供を受け、プログラム充実に向けて準備に入ることとなった。

* 一般科目

2.3　プログラム内容の修正

前回の海外研修からの反省点として以下の 3 点を考慮に入れ、プログラム内容に修正を加えていった。

⑴　ホームステイは一家庭に学生 1 人。
⑵　午後に ESP 授業を導入。
⑶　週末のアクティビティなどは最小限に抑える。

1 点目に関しては、前回のプログラムでは日本人 2 人で 1 家庭にステイするということがあり、学生からステイ先でどうしても日本語を使用してしまうため研修の意味が薄れる、などといった不満の声が聞かれた。そのため今回は 1 家庭に学生 1 人を原則とし、質の高いホストファミリーを確保するための調査に入った。

2 点目の ESP（English for Specific Purposes）授業については、オークランド大学の工学部教員による工学系授業の提供を試みた。英語力を伸ばすことが目的の一つである海外研修であるが、高専という特質を考慮に入れ、専門性に富んだ内容のある授業を英語で受講する経験も必要と考えての措置である。

3 点目の勉学以外の要素についてであるが、海外研修にはどうしても施設見学や名所訪問、ツアー参加といったアトラクション的な要素が付加されてしまうことが多い。だがそれらの全てが学生にとって意義があり教育的な価値を見出せるものばかりとは言いがたい。前回の研修後に実施したアンケートからも明らかになったが、博物館見学などは不評のため今回は廃止した。現地の施設見学を行なうためには背景となる知識を深め、目的を明確にしておかないと、見学が実りのあるものとならないため、アトラクションは各自の自由時間に組み込むこととした。

3.　オークランド大学について

オークランド大学は、ニュージーランドにある 8 つの国立大学の中でも最大規模の大学で、38,000 人の学生を擁している。2008 年には 125 周年を迎える歴史ある大学である。

English Language Academy（以下 ELA）は、大学附属の語学学校であり、大学への入学を希望する学生の英語力向上を図ることが中心の ESL プログラムなどを提供している機関である。

4.　事前オリエンテーション

前回のプログラム同様、出発前のオリエンテーションを ISA のスタッフと共に保護者説明会を含めて合計 6 回実施した。

表 1　海外研修学内事前オリエンテーション

回数	日程	研修内容
第 1 回	11/8	保護者対象説明会
第 2 回	12/8	渡航オリエンテーション
第 3 回	12/20	ホームステイオリエンテーション 1
第 4 回	1/24	大学関係オリエンテーション
第 5 回	1/30	ホームステイオリエンテーション 2
第 6 回	2/23	最終オリエンテーション

表 1 にあるように、内容は、パスポート申請についての説明やニュージーランド事情、オークランド大学の様子といった基本的な内容から、ニュージーランド特有の英語を発音、表現の両側面から解説し指導を行うものと多岐に渡った。またホスト・ファミリーとの過ごし方等詳細に渡る説明がなされた。海外経験のある学生が余り多くなかったこともあり、渡航に関する説明は十分に行われた。前回は 4 回であったことを考えると、実施に向けた準備の周到さ、オリエンテーションの内容の濃さ、について向上が見られる。

保護者説明会を受け、最終的な参加希望学生は、35 名にも上った。昨年度に実施できなかったことも背景にはあるが、語学研修に対する関心の高さがうかがえる。

5.　現地にて

シンガポールのチャンギ空港を経由しての長旅の後、無事にオークランドに到着した。現地ホームステイ担当機関であるニュージーランド国際交流協会（NZIIU）に立ち寄り、そこでホストファミリーと対面した。翌日は ELA にてプレースメントテストの後、早速午後の授業に入った。

研修中、平日は午前 9 時から 12 時 10 分までは General English であり、午後は ESP の授業を行った。今回のグループのみで、他国の学生などの入らない closed なクラス編成であった。

金曜日の午後は授業がなく、ELA 主催のアクティビティに参加する者や、街に出てショッピングを楽しむ者などさまざまであった。

週末は主にホストファミリーと過ごすことが多かったようである。ファミリー同士が友達である場合などは、複数の家族で出かけたり、パーティを開くなど、それぞれ思い思いに過ごしていたようである。

ホストファミリーとの人間関係において問題は特になかったようである。しかしながら、ホストファミリーの立地が ELA からは程遠いところにあったこと、盗難が 1 件、ホストファミリーの予期せぬ変更など、いくつか問

題が表出したことも確かである。ほとんどの問題は現地ELAやNZIIUのスタッフと引率教員とのやり取りのうちに解決を図ることができた。しかしながら、今後はより円滑な連絡体系の確立や、ホームステイ先の再検討などが課題として残された。

6. 事後のケア

平成18年度ホームステイプログラム参加者に対して、4月より授業担当教員を通じて、アンケートが配布され、回答が回収された。参加者35名の内、卒業し学外に出た者、未提出の者を除く32名がアンケートに回答し、それらを有効回答とした。

アンケートは、「事前準備」、「ホームステイ生活」、「学校生活」、「プログラム全般」、「後輩へのメッセージ」の5つの項目に分かれており、全24の質問から構成されている（アンケート全文はAppendix参照）。全て自由記述方式である。

以下に、各項目についての参加者による回答をまとめ、今後の参考や課題を探る。

6.1 事前準備

Q1への回答から、準備としての英語学習については、十分ではないことが分かる。「参加＝英語が上達」という安易な考えがあるのかもしれない。そうした十分ではない準備への反省が、Q2の回答から見て取れる。また、実施時期の問題として、学年末の追試験や課題、インフルエンザなどの影響も若干見て取れる。

とは言え、英語学習そのものに時間がかかること、研修の直前に慌てて勉強をしても過度の期待はできないことなど、について平素の授業において周知して学習に取り組ませる必要があると思われる。

Q1. ホームステイ前に英語の勉強はどれぐらい、またどんなことをしましたか?

- 英語のラジオ番組を数ヶ月聴くようにした。
- DUOを登下校中に聴いていた。
- ホームステイ用の英会話の本で勉強した。
- 特にしていない。
- インフルエンザや追試などで何もできなかった。

Q2. こんな勉強（英語に限らず）をしておいたらよかった、と思うものは何ですか?

- 簡単な英語（中学校レベル）がすぐに頭に浮かぶようにする訓練。
- 単語力。
- 自分の感情を出す単語をもっと覚えておく。
- 現地でよく用いられる固有名などを知っておくと便利。

6.2 ホームステイ生活

生活習慣について、日本とニュージーランドとの違いを感じながら、ステイ先に合わせる努力をしていたことが回答からよく分かる。特にシャワーについては多くの学生が回答を寄せていた（Q2）。

ホストファミリーについては、概ね好意的に捉えていることが回答から窺える。学生の受け入れに慣れていたファミリーも多かったようで、何度も繰り返し言うなど、丁寧に聞こうとしていたようだった（Q4）。それに応えて、学生もコミュニケーションを粘り強く取ろうとしている様子が見て取れた。

Q4において、コミュニケーションにおいて否定的な意見が少数見られた。意見を言い合うところまではできたようだが、学生側が引いてしまっている事例である。引率教員がこのことを知らされたのは、帰国時であった。当該学生自身も、このことを了承の上で研修を継続していたが、今後は引率者や現地担当者との連携を強化したい。

Q2. ステイ先での約束事を教えて下さい。（洗濯はどのようにしたか、どんなお手伝いをしたか、日本への連絡方法、生活上気をつけるべきことなど）

- 洗濯は自分でした。食器洗いの手伝いなど。
- 帰る時間や行き先は常に伝えておくこと
- ベッドメイキングはきちんとする。ドアは部屋にいないとき開けておく。シャワーは10分以内に終わらせる。洗濯はホストマザーが土日にしてくれた。手伝いは夕食を机に運ぶ、ごみ出しだけ。日本へは自分の携帯電話で連絡した。

Q4. ホストファミリーとのコミュニケーションについて教えて下さい。（ホストファミリーとうまくいかなかったことがあったか、またその際、どう対処したか、ホストファミリーの英語は何パーセントぐらい分かったかなど）

- 家に帰ってから、今日の出来事と休日の外出の計画などについて話した。ホストファミリーは一生懸命言おうとしている

ことを理解しようと努力してくれた。

- 小さな子供は何を言っているのかあまり分らなかったが、親はゆっくりしゃべってくれたのできき とりやすかった。30%
- 80～90%分った。外出禁止をやめてほしいと何度も言ったが、納得してもらえなかった。
- できるだけしゃべりたくなかった。言い合いをして私が諦めました。
- 家族間の会話には入れない。理解できない。

Q5.　ステイ中に心がけたこと、またこれだけは気をつけたほうがいい、ということがあれば具体的に教えて下さい。

- 簡単な英語でいいので、質問には必ず答えるようにする。
- ホストファミリーとの約束を守る。
- 何にでも積極的になる。
- 部屋にこもらず、リビングでホストファミリーとできるだけ長い時間を過ごすようにした。あいさつは欠かさなかった。
- 風呂の時間（特に朝）。
- ドアは寝るとき以外開けっ放し。

6.3　学校生活

学校の授業は、明石高専で開講している英会話やオーラルイングリッシュと大差ないとの印象を受けた学生が多かった（Q1）。こうした回答は、前回の研修の際にも見られた。引率教員であった第二筆者も授業を見学したが、その際の印象も、同様であった。違っているのは、学生数と学生個々の動機付けの高さであろう。

また、今回の研修では、明石高専の学生を 2 グループに分けたクラス構成であり、教室内には日本人学生だけがいた状態であった。もしクラス内に、他国の学生や、別グループの日本人学生がいたとすれば、回答に変化が見られたのかもしれない。

今回のプログラム独自のものとして、午後の授業を工学系の授業としたことや工学部や工場の見学、大学教員による出前授業がある。概ねそれらへの反応は好意的であったことが Q3 への回答から窺える。

Q1.　授業の様子はどんな感じでしたか?（高専の授業と比較しても構いません）

- 専攻科 1 年で学ぶハーバート先生の「オーラルイングリッシュ」の授業に似ていました。
- 高専生だけのクラスだったので日本語が多かったのが残念。授業はおもしろかった。
- 授業は英会話の授業と似ている。クラスの人と英語で話すのが多かった。
- 午前中は割とカンタン。昼からはちょっと難しかった。授業の雰囲気は話しやすくてとてもよかった。

Q2.　受けた授業の中に興味深かったもの、役立つもの、是非受けるべきもの、があれば教えてください。

- 自動車製造工程の説明（解説ビデオを観て、何をしているのかを聞き取り、説明する）。
- 英語でのプレゼンテーションが少し大変だったけど良い経験だった。
- 大学見学・工場見学が面白かった。
- 大学の先生の講義。

6.4　プログラム全般

今回の研修では、ステイ先が研修先から遠くなったため、通学はスクールバスでのピックアップを採用せざるを得なかった。そのため、学生同士が固まる時間が増え、日本語の使用頻度はかなり高くなってしまった（Q1）。

Q2 への回答から、実感としての英語力の向上は余り見られなかったものの、Q3 の回答に見られるように、今回の研修が学生の動機付けに大きな変化を与えていることが分かる。実際に言語を使用するという環境に身を置くことのインパクトは相当であり、この側面が研修の主目的であると言ってもよいのではないであろうか。また、英英辞書の使用など、学習の具体的な方法面にも影響があるようである。

Q4 への回答でも、今回の研修が動機付けに与える影響の大きさを物語っている。大半の学生が、今回の研修により、英語でコミュニケーションを図ることの重要性や楽しさを改めて理解したようである。

一方で、「片言でもなんとかなる」と言った意見もある。研修中にも、「単語を並べればなんとか通じる」という意見を聞いた。確かに買い物や簡単な会話を行う上で、このことは事実である。しかし、より正確で内容のある意志の疎通のためには、片言では十分ではない。こうしたことを研修前に周知させることも必要だったのかもしれない。

Q1. 研修中、他の日本人の友人とどれぐらい接しましたか?（つまり日本語でどれぐらい話したか?）

- 授業時間、ファミリーと過ごすとき以外は、常に日本語で友達と話していた。
- バスの中とかはずっと日本語だった。授業中は英語だった。

Q2. 研修で英語力はどれくらい伸びたと思いますか?

- 店、道端での会話、質問は問題なくできるようになった。
- 大幅に伸びたとは思わないが、少しは向上したと思う。
- 日本語に置き換えずに考える事が多くなった。
- 耳が慣れた程度。伸ばすのはこれから。
- 伸びたとは特に思わない。
- よく分からない

Q3. 研修を受けて、英語に対する考え方や勉強の仕方に変化がありましたか?それはどのような変化ですか?

- 英語を学びたいという意欲が向上したと思います。
- 英語を話すことの抵抗がなくなった。
- ボキャブラリーに対する貪欲さ
- 英語を学問としてではなく道具と考えるようになった。
- 自分から英語を使っていかないと使えるようにはならない（シャドーイングやリスニングも大事だが、英語をつくる、しゃべる練習もしないといけない）と思った。
- 英英辞典をよく使うようになった。英語は勉強ではないと思った。

Q4. 研修を通して学んだり経験したことで、今後に役立つことがあれば教えてください。

- 具体的には分からないけど、自分とは全然違う人達に会えた。度胸や行動力もついたかもしれない。
- 外国の人と英語で話す自信がついた。
- 言葉の壁の 80%は失敗を恐れる心の壁である。
- なるようにしかならない。何とかなる。
- NZ でいろんな国の人と出会ったけど、どこの人とでも英語でコミュニケーションがとれるのがわかった。
- 改めて日本を知ることができ、外国人は日本をどうみているか知ることができた。
- 英語そんなできんでもやっていける／片言話せればなんとか生きていける。

7. 今後の課題

第 2 回目のホームステイプログラムが実現し、事後アンケートの回答などから、今回のプログラムは概ね学生の英語運用能力向上と異文化体験の一助となったと考えられる。また、第 1 回目のプログラムからの課題のいくつかについては改善を施し、それらについても一定の成果を得たと言ってよいのではないだろうか。

今後もプログラムを継続するにあたり、第 1 回目のプログラムも含め、検討すべき課題を以下に述べる。

1）実施時期･実施人数の問題

平成 16 年度にカナダ、平成 18 年度にニュージーランドと隔年での実施となったホームステイプログラムであるが、平成 17 年度には実施可能な参加希望者が集まらなかった。この 3 年間の経過を見て、今後どのような間隔で実施するかを検討すべきであろう。

ただし、前回と今回の参加者を見ると、平成 16 年に 28 人、平成 18 年には 35 人と、いずれも多数の参加者であり、プログラムへの需要は高いことが分かる。継続的に毎年実施するのであれば、例えば定員を定めるのも一案であろう。こうすれば、後援会からの援助についても計画的に受けることができるという利点もある。

実施時期については、これまでは春休みの実施がなされていたが、短所としては、学生の単位取得の問題、インフルエンザ流行などの問題がある。一方、夏休みの実施については、平成 19 年度から前期終了後に夏休みに入ることから、単位取得についての問題はなく、利点の一つとなっている。しかしながら、高専体育大会など部活動との関連、インターンシップが夏休み中に多く実施されることなど、障害も多くあるのが実情である。現時点では春休みでのプログラム継続を検討しているが、今後も時期についての議論は重ねなければならない。

2）プログラム内容の改善

今回のプログラムでは、本校学生のみのクラス構成となってしまい、他国留学生との交流が限られてしまうという欠点が明らかとなった。今後は、他の学生との混合クラス編成を取り入れることにより、学生の交流の幅を広げることができ、異文化体験が充実すると考える。

午後の ESP のクラスは、本校学生用に設定されたものであり、工学部見学や工場見学、工学部からの出前講義（アルゴリズムについて）などを取り入れ、学生にも概ね好評であった。今後は、本校専門学科教員の要望など

も取り入れることによって、明石高専独自のプログラム作りができるのではないだろうか。

3）引率の問題

これまでのプログラムでは引率者が 1 名つき、現地での問題等に対処してきた。また、上述の通り、今回のプログラムでは、残念ながらいくつかのアクシデントが起こったため、引率者の必要性が再認識される結果となった。

また、引率者は、学生のケアをするのみならず、プログラムの単位化や、学校間の交流などを視野に入れた活動を現地で行うことができるという意味で必要ではないであろうか。今回のプログラムでも、引率者が、現地語学学校代表や、オークランド大学の交流担当組織の担当者と会談する機会を得ることができている。

さらには、教員のみならず、職員にも、参加者あるいは引率者としての参加を促してはどうであろうか。費用などで工夫が必要になるかもしれないが、一考に値するのではないだろうか。

4）単位化･学術交流・協定締結への動き

2.1 に述べているように、国際交流委員会内に、学生派遣専門委員会・学術交流専門委員会が組織されている。これら専門委員会での議論を重ね、ホームステイプログラムの単位化・派遣先大学・学部との協定締結への動きを活発化させる必要がある。

上に述べたように、今回のプログラムにおいて、大学の関係者とコンタクトを取ることができている。これを活かして、今後のプログラムの充実を図り、プログラムの継続を促したいところである。その中で、学科･学部間での交流、更には学校間の交流を生み出すことができればと考える。

参考文献

1）ネバラ・ジョン、穐本浩美.　（2005）.　「平成 16 年度明石高専海外語学研修プログラム: 実現までの経緯と今後の課題」.　『明石工業高等専門学校研究紀要』. 48, 106-111.

Appendix　　事後アンケート全文

事前準備

Q1.　ホームステイ前に英語の勉強はどれぐらい、またどんなことをしましたか?

Q2.　こんな勉強（英語に限らず）をしておいたらよかった、と思うものは何ですか?

Q3.　ホストファミリーから聞かれた質問にはどんなものがありますか?

Q4.　ホストファミリーへのお土産として何を持っていきましたか? また金額はどれくらいですか?

Q5.　研修中に使った小遣いはどれぐらいですか?

Q6.　研修にこれだけは持参する必要あり、持っていけば便利だったと感じたものは何ですか?

ホームステイ生活

Q1.　ステイ先の様子を教えてください。（ホストファミリーとの初対面の様子、家の様子、与えられた部屋の様子など）

Q2.　ステイ先での約束事を教えて下さい。（洗濯はどのようにしたか、どんなお手伝いをしたか、日本への連絡方法、生活上気をつけるべきことなど）

Q3.　ステイ先での食事について教えて下さい。（食べられないものが出てきた時はどう対処したか、ホストファミリーと外出･外食した時の費用はどうしたか、日本料理を作る機会があったか、など）

Q4.　ホストファミリーとのコミュニケーションについて教えて下さい。（ホストファミリーとうまくいかなかったことがあったか、またその際、どう対処したか、ホストファミリーの英語は何パーセントぐらい分かったかなど）

Q5.　ステイ中に心がけたこと、またこれだけは気をつけたほうがいい、ということがあれば具体的に教えて下さい。

学校生活

Q1.　授業の様子はどんな感じでしたか?（高専の授業と比較しても構いません）

Q2.　受けた授業の中に興味深かったもの、役立つもの、是非受けるべきもの、があれば教えてください。

Q3.　授業中、先生の英語は何パーセントぐらい分かりましたか?

Q4.　着いたばかりの時と帰る時とでは、授業中の先生の英語に対する理解度にどれくらい差が出ましたか?

Q5.　受講にあたって気をつけなければならないことは何ですか?

プログラム全般

Q1. 研修中、他の日本人の友人とどれぐらい接しましたか?（つまり日本語でどれぐらい話したか?）

Q2. 研修で英語力はどれくらい伸びたと思いますか?

Q3. 研修を受けて、英語に対する考え方や勉強の仕方に変化がありましたか?それはどのような変化ですか?

Q4. 研修を通して学んだり経験したことで、今後に役立つことがあれば教えてください。

後輩へのメッセージ

これだけは準備しておいた方がいい、現地でこれだけは心がけた方がいい、など何でも結構です。これから研修に行く皆さんの後輩へメッセージをお願いします。